

「学力低下」は本当か？

■ 基礎学力(到達度)

平均点・・・数学5位, 理科6位

経年変化・・・数学: 中2は1995年より-11点(有意), 小4はn.s.

理科: 中2はn.s., 小4は1995年より-7点(有意)

学力格差・・・国際的に見ると, 格差は小さい

■ 意欲・関心・態度

「算数の勉強が楽しい」・・・中2, 小4とも下から2位

「理科の勉強が楽しい」・・・中2, 小4とも下から3位

「勉強への積極性(中2)」・・・数学: 下から2位, 理科: 最下位

■ 放課後の時間の使い方(中2)

「宿題をする」・・・1.0h(最下位。AVR=1.7)

「テレビ・ビデオを見る」・・・2.7h(1位。AVR=1.9)

(国際教育到達度評価学会(IEA)の数学・理科の調査(2003))

学力低下というより, 学ぶことへの意欲・関心がない

フタコブラクダと学力保障

■ 学力低下という現象

学校や教委が種々の取組

宿題、学習規律、教え方の工夫etc

■ 学力低下の実態は？

学力の“フタコブラクダ”化

低い学習意欲(PISA2003では、世界のほぼ最底辺)

* 心理学的にみれば・・・

学習は自己実現欲求や影響力欲求レベル

→他の欲求が満たされたのちに活性化する欲求

**学力への欲求を刺激するには
前段階の欲求(安心安全・交流・承認)充足が不可欠**

ソーシャル・ボンドと不登校

「なぜ逸脱するのか」ではなく「なぜ逸脱しないですんでいるのか」
という観点こそ重要ではないか？

子どもを社会的集団につなぎとめておく
「**関係の束**」(ソーシャル・ボンド)

これが「切れた」とき、不登校や非行といった「問題」が出現？

問題に着目するより、子どもが
「学校に通うことの意味」をソ
シャル・ボンドの観点から検討
するほうが重要では？

「問題」の起きる子どもと、そう
でない子との間に、性格等の
面での「大きなちがい」はない
のでは？

「**関係の束**」(ソーシャル・ボンド)を築くこと、
築ける人間への成長を図ることが不登校の予防

指導・支援に関する基本仮説

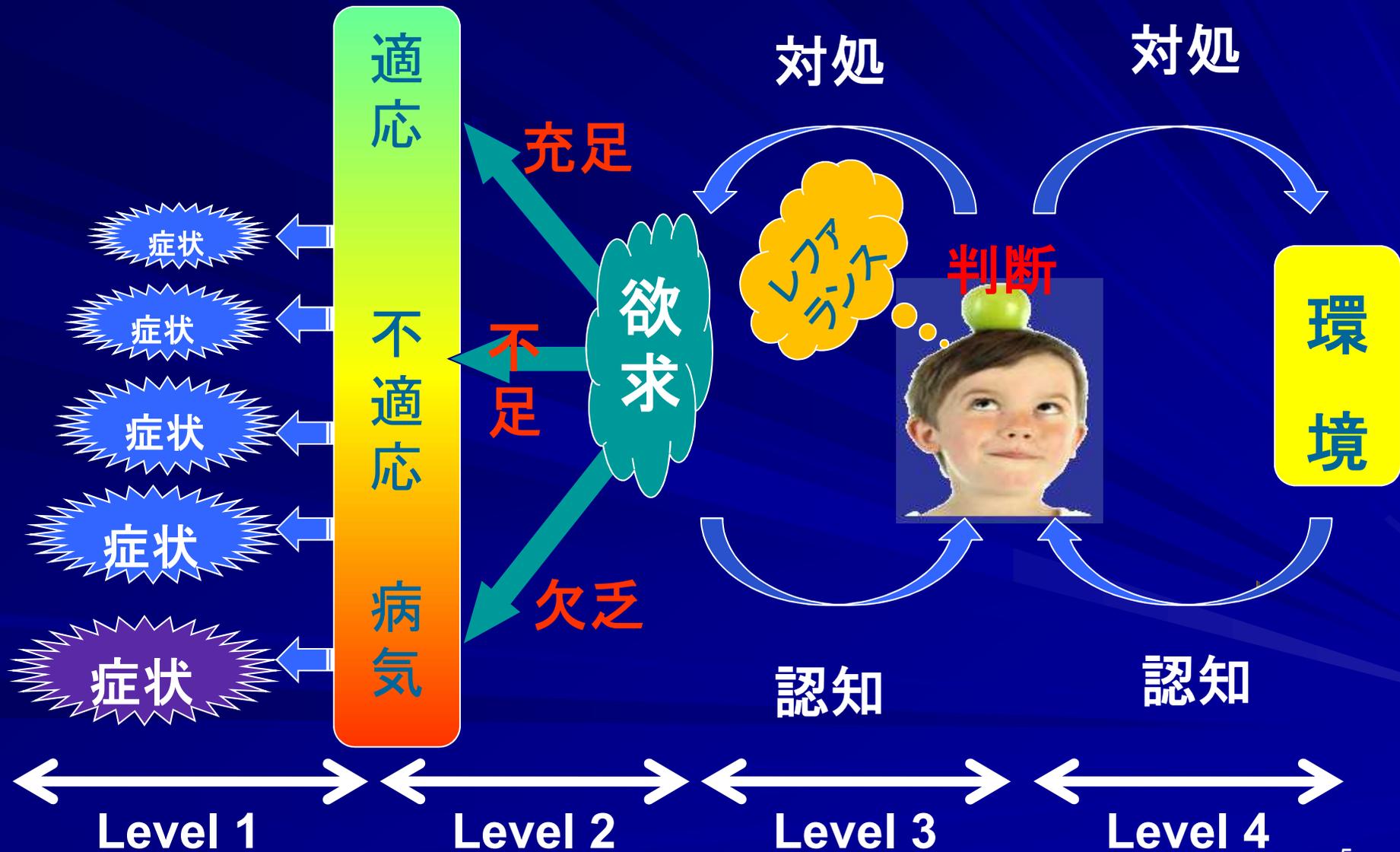
ソーシャルボンドは社会集団からの脱落の予防要因
(Hirschi, 1969)

全児童・生徒に対して
良質のコミュニケーションを大量に提供するプログラムを実践

- 1) 児童・生徒のコミュニケーション能力の改善
- 2) ソーシャルボンドの構築

- 1) 児童生徒の学校適応感は改善
- 2) いじめ・不登校は減少

適応のメカニズムと生徒指導



問題はなぜ持続するかー自動販売機の理論ー



荒れた状況解決へのヒント 1

- ①“指導か，支援か”の二者択一ではない。指導も，支援も。
- ②十分な支援をしていない教師の指導は入らない。
- ③指導が必要な状況にある生徒は，何らかの生きにくさ，しんどさ，スキル不足等を抱えている。その部分が何かを考え，支援する。
- ④問題行為については厳正に指導する。そのとき本人が，「指導されてもやむを得ない」と納得するところまで粘り強く関わる。
(そのためには，日常的な支援が不可欠)
- ⑤保護者の信頼感獲得が重要。

荒れた状況にある子どもへの 指導・支援のヒント

<背景の理解>

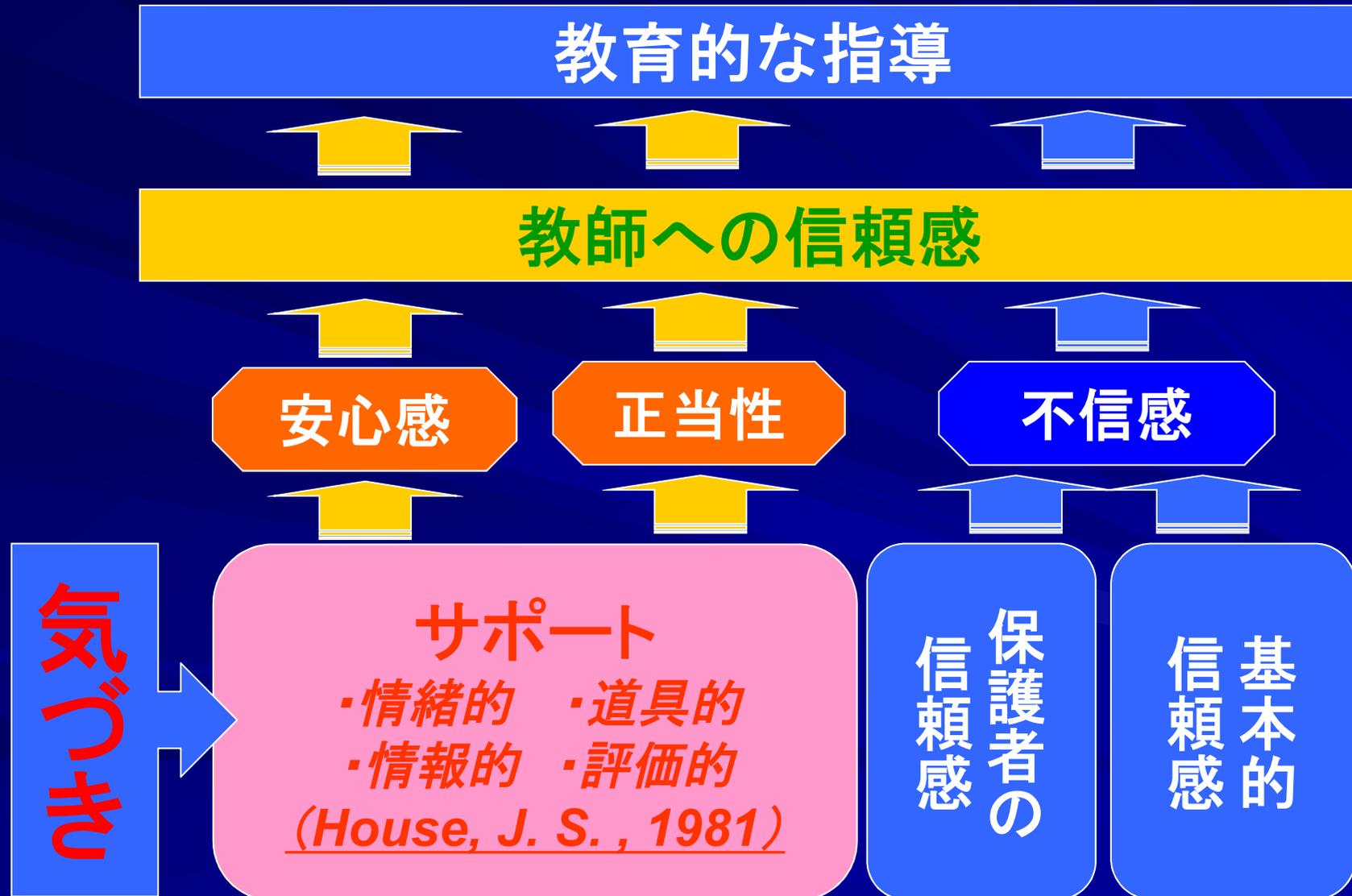
- ・発達的問題
 - * 状況・他者の感情を読めない
 - * 衝動性をコントロールできない → 否定的関わり
- ・養育上の問題
 - * 愛着障害 → 善意・愛情を受け取れない
 - * 行為障害 → 罪悪感を感じられない
- ・欲求・・・所属したい, 愛されたい, 認められたい

<対応の基本>

- ①個別指導でていねいに
- ②集団指導で関わりすぎない
- ③挑発されない
- ④追いつめない
- ⑤あきらめない

心や対人関係の成長レベルは何歳？

指導と支援の関係



マルチレベル アプローチ

すべての生徒
(一次支援)

一部の生徒
(二次支援)

特定の生徒
(三次支援)

品格教育

協同学習

グループ活動

Social and
Emotional
Learning

ピア・サポート

小中連携
欠席の管理
による早期介入

SCを活用した
チーム支援

実践プログラム (一次・二次・三次アプローチ)

専門性

チーム性

アドバンス・スキル

ベーシック・スキル

教師
集団

役割の分担

理念・目標・方針の
共有

情緒的つながり

保護者

地域

関係者

教育委員会

実践プログラム支援機能